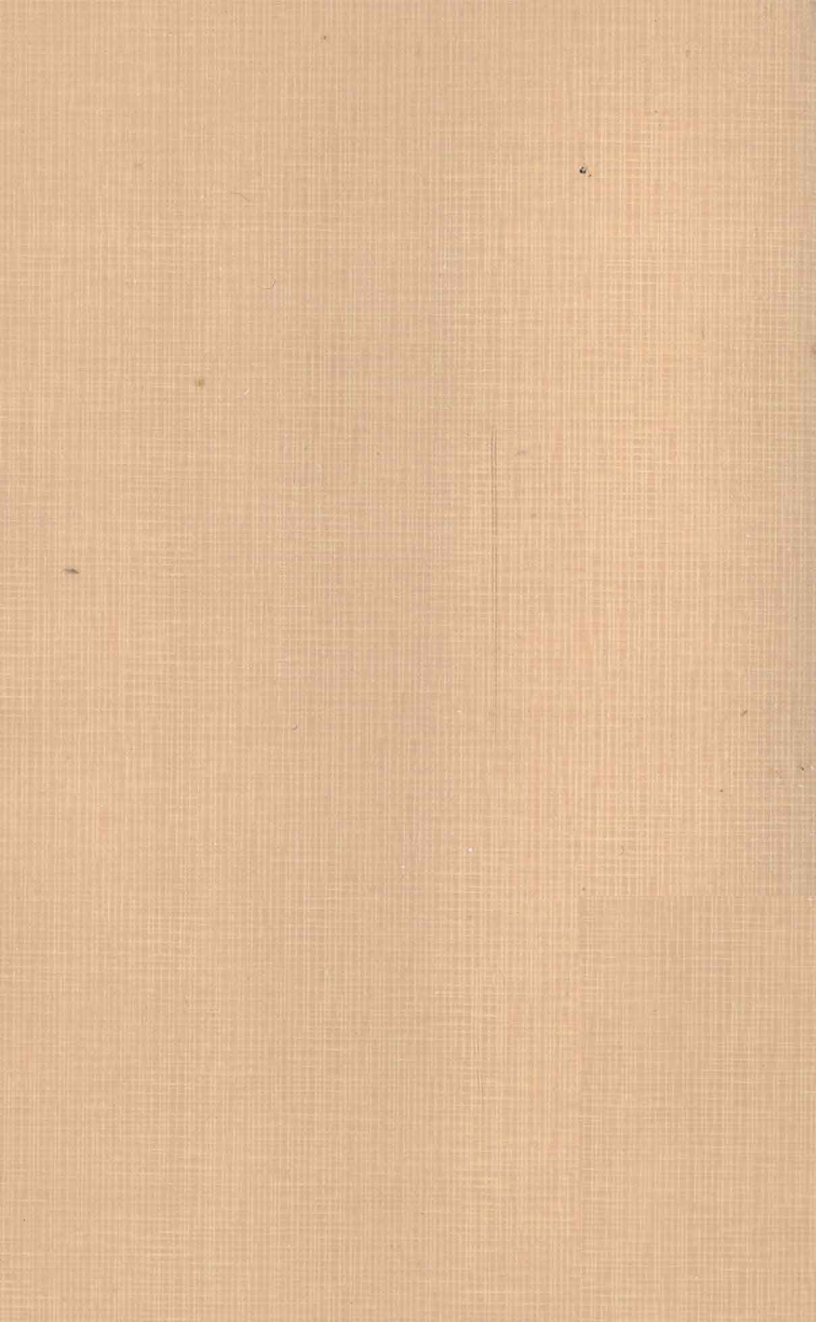




サユリ・マイ・ミステリー

定価七〇〇円

昭和六〇年九月三〇日第一刷発行

企画——株式会社リコー

編者——山村正夫 ©1985 MASAO YAMAMURA Printed in Japan

発行者——野間惟道



発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二—二二 郵便番号一一二 電話東京(〇三)—九四五—一一一(大代表)

印刷・製本所——株式会社東京印書館

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送り下さい。送料小社負担にてお取替え致します。

書き下ろし競作推理

山村正夫・編

サユリ・マイ・ミニステリー

真先 梶龍雄 大谷羊太郎 草野唯雄 小林久三 菊村到 山村正夫

ブックデザイン

黒川 栄治

カメラ

横須賀 功光

制作

ユーアイプロダクション

目次

はじめに……………	山村 正夫……………	6
女はいつもミステリー……………	辻 真先……………	9
故郷 ふるさと のない女……………	梶 龍雄……………	37
死者の踊り……………	大谷 羊太郎……………	69
ワープロ探偵……………	草野 唯雄……………	101
花の航跡……………	小林 久三……………	135
愛されて死の匂い……………	菊村 到……………	167
未の遺書……………	山村 正夫……………	199

はじめに

山村正夫

これまで芝居や映画、テレビなどの分野では、特定の俳優さんを想定し、それにあてはめて脚本を書くことが珍しくなかったようだが、小説の方ではあまりそうした例がなかった。

とはいえ、小説の場合も登場人物の設定がすべて作者の空想から生れているわけではない。誰かしらモデルがあるわけで、それをもとに性格づけをすることになりはしない。私など身近に適当なモデルが見つからないときは、著名な男女の俳優さんを頭に思い浮かべ、その人たちが演じたドラマの役柄を参考にして、作中人物のキャラクターを考えることにしているくらいだ。

したがって芝居や映画のような試みが、本当はもっと早く為されてもよかったのではないだろうか。

吉永小百合さんは、現代におけるもっとも人気の高い女優さんである。かつては清純派のスターとして「サユリスト」たちの憧れの的だったが、あらゆる女の役をこなす、このところの演技派としての脱皮ぶり、目覚ましいものがあるといっている。「天国の駅」や「おはん」「夢千代日記」など、最近話題を呼んだ映画の主演作品を見れば、自ずとわかっていうものだろう。

一方、なかなかのミステリー通でもあるそうで、私も彼女の大ファンの一人として、今日まで注目してきた。

今度その吉永小百合さんをイメージ・キャラクターにして、何人かの推理作家の手で推理短編の競作を行

なうことになった。執筆の条件は、各作品とも主人公の名前だけは「サユリ」で共通させるが、後は一切制約なし。年齢、職業、性格など、それぞれ自由に発想して独自のストーリーを創作しようというわけである。

私の個人的に親しい推理作家で同様に小百合ファンでもある方たちにお願したところ、揃って快く引き受けて下さった。大谷、梶、小林、菊村、草野、辻の諸氏は、いずれも推理小説界のベテラン作家にほかない。

本書に収めた七篇の作品は、私をふくめたそれらの諸氏の成果のあらわれで、ジャンル別には本格物あり、サスペンス物あり、ユーモア・ミステリーありと、おのおのの個性が存分に発揮されていてバラエティに富んでいる。だが、何よりも特筆すべき見所は、各作家が吉永小百合さんをモデルにして、いかにそのイメージをふくらませ推理小説化したかにあるといえるだろう。

アイディアとしては一種のお遊びになるのかもしれないが、この種の企画が今後の推理小説の可能性に、新しい突破口を開くものになるかもしれない。また吉永小百合さんにも、これをもとにぜひ一段と役柄の巾をひろげ、ミステリー・ドラマの主演を次々に実現させてほしいものである。

いずれにせよ、この新機軸の趣向を凝らした「サユリ・マイ・ミステリー」を、多くの「小百合ファン」はもちろん、ミステリー・ファンにもたっぷり楽しんで頂きたいと思わずにはいられない。

一九八五年七月



女はいつもミステリー

辻 真先



辻 真先 つじ・まさき

昭和7年，名古屋生れ。昭和29年 NHK 入り，テレビドラマ，バラエティなどを演出，昭和37年からフリー。動画脚本，漫画原作執筆から推理小説に手を染める。

主な作品『バス通り裏』『ジャングル大帝』『サザエさん』『迷犬ルパン』シリーズなど。

カタン、と硬質の音が聞こえたので、初老のマスターはためらいなく、彼女をふりかえった。思ったとおりだった。カウンターにもたれかかって体を揺らしている彼女の肘をかすめて、琥珀色の液体がつーうと流れてゆく。

ペテランの彼は、他の客を刺激しないように、そつと女の前に近づいた。倒れたグラスを起こし、なにげなくグラスを使いながら、話しかけた。

「少々おすごしになったようですね。お嬢さん」

「お嬢さん」は、にっと笑った。

「お世辞？ 嬉しいわ」

年はたぶん三十を越しているのだろうが、大きめのサングラスが世慣れたマスターの判断をさまたげていた。それでも、色白で形のいい顎と、笑み割れたときこりどく頬が、皮女り美尻を呆正っている。

銀座へ根を下ろしてからでもかれこれ二十年、人間に飽きたマスターは、人間を見る術に長じていた。

……その彼のアンテナに、最初からひっかかっていたのが、はじめて見るこの女客だった。

オフホワイトのワンピースに広幅のベルトをアクセサリーにして、垢抜けてはいるが、さして金がかかっているようには見えない。印象はむしろ堅実な家庭の主婦なのに、サングラスが異様であつたし、店へ入ったときから、したたかに酔っている気配であつた。

カウンター席についてからも、たてつづけに三杯、ウィスキーのストレートをあけている。飲まずにいられない事情があるのだろう、酔いはとめどなく深まるように見えた。

それでも、マスターに声をかけられて我にかえったのか、急にそわそわして尋ねた。

「いま、なん時かしら」

マスターが答える前に、隣で飲んでいた常連客の可危が、髪を攪き攪きする。

「十時を五分回ったばかりです」

「ありがとう……」

女性はもう一度ほほえみ、マスターに勘定をたのんだ。

風が吹きすぎるように、彼女の姿が見えなくなると、克郎とマスターはなんとなく顔を見合わせた。

「やはり、人妻かな」

「奥さんには違いなのですが……旦那に浮気されて頭へきた、といった風情ですな」

「対抗上、自分もへべれけになってやる、ということか。キッチン・ドラんカーの卵というわけだ。惜しかったな」

と、克郎は彼女の消えたドアを見やった。

「口説かれるのを待っていたのかもしれない……おや」

体をかがめた彼は、床から数枚の名刺を拾いあげた。

「いまの彼女が落としていったんだ。勘定をはらうと

きに」

名刺には、名と住所のみ記されていた。

「緒方サユリか……いい名だ。覚えとこう」

「今度あのお客さんがいらしたら、すぐ『夕刊サン』に電話しますよ」

マスターが笑った。それが克郎の勤め先だ。マスコミ人種には縁遠い、ヌーボーとして見える若者だが、これでも新聞記者のはしくれなのだ。

「よろしく」

と、克郎も笑いかえしたが——実際には彼女が、二度とこの銀座のバー、『クール』へ現れることはなかった。

2

秋の冷気が肌を刺した。街路樹から落ちた葉が、カラカラと乾いた音をたてて、舗道をかけぬけてゆく。緒方サユリの白い脚にまつわりついた枯葉が、すぐ

彼女に興味を失ったように、離れて飛んでいった。

久々にアルコールを含んだ呼吸が、サユリの口からあふれて、彼女はひと息つくために立ち止まった。暗くなったショーウィンドーをのぞくと、そこに化粧の崩れかかった女が、立っていた。

(サユリ、かわいそう)

と、そのガラス窓の女が呼びかける。

(迷っているのね……辛いでしょ)

(貴方は黙って！)

サユリは、窓に映る自分をにらみつけた。

窓の中の女——もうひとりのサユリが声高く笑った。

(まあ、怖い。そうね、それがあんたの本性的のよね)

(え)

(ふだんのあんたは、悟りました高僧のような台詞をいってるけど、本当は悔しくてたまらないのよ。いまもし祥一郎が目の前にいたら、貴方どうする？

つものようにお淑やかに笑ってみせる気)

(もちろんよ……それがいけないっていうの)

(いけないわ。絶対、いけない。あいつの胸にむしやぶりついて、ネクタイをひきちぎって、顔にひっかき傷をつくってやるのよ。さもなければ、『どちらさまでしたっけ』とかなんとかとぼけてやればいい)

(そんなこと……)

サユリは舗道に目を落とした。

(できないわ、私には)

(そうでしょうね)

もうひとりのサユリが、匙を投げたようにいった。

(貴方にはできない。貴方の性格が弱いんじゃない。ただ、それだけあの男に惚れているから。でもそれは偽善なのよ)

(偽善ですって)

(そうよ！ あんたはあの男に惚れているんだ。だから独占したいんだ……でもあいつは別の女のところへ行っちゃった。あんた、憎いんだろ。当然だよ、祥

一郎だって憎い、女だって憎い！　だつたらなぜ、それを正直にぶつけないのさ。陰険だよ、いやらしいよ、あんたって女はね)

もうひとりのサユリのことばは、次第に下卑たものに変化しつつあった。おのれの心が奥底からしぼり出す、声にならない声を、サユリは呆然と聞いている。

(そうさ。もとはといえば、あんたがあつた男を甘やかしたんだ。大学を留年して送金を止められたあいつに、あんたはせつせと貢いでやった。そのおかげで、やつと人並みに就職できたんだ、あいつは)

(そのあいつ呼ばわりはよして)

サユリの抗議を、サユリが鼻先でせせら笑った。

(それが偽善だというのさ。自分を裏切った男に、敬称をつけるってのかい)

(……だって私、祥一郎さんの気持がわかるもの。彼女——福島頼子さんは、おなじ商社でも、祥一郎さんの勤め先より、ずっと大手の会社の、重役令嬢でしよう)

(それがどうしたっていうの。令嬢も姫君もあるものか。あんたの亭主を盗んだ泥棒じゃないのさ。いい加減親にも見放されて、ひとりでマンション暮らししてるんだ)

(だけど、考えてみて。いまの会社では祥一郎さんに出世の望みはないけど、彼女のお父さんの下に移れば、新しい道がひらけるのよ。サラリーマンなら、誰だって抱く望みだわ……妻として、夫の夢を壊したくなかつたの)

(あははは。おかしい。とても、おかしい)

(どうして？　なにをそんなに笑ってるの)

(はん、自分だつてわかつてるだろ。わからないふりをするなら、教えたげようか。あんたは、亭主が出世のきつかけを掴みたいばかりに、心ならずも福島頼子のいいなりになった、そういいたいのさ。自分と頼子を天秤にかけた亭主が、とどのつまりは自分を捨てた——そんなこと、天地がさかさまになっても信じたくないもんね)

(……)

(ほら、黙ってしまった。凶星だったよね)

(……)

(考えてみると、あんたが悪いよ。バーのアルバイトまでして、未来の亭主を支えた……大学の卒論も、あんたが手伝った。そんな調子じゃ、どんな男だつて骨抜きになっちまう。人間誰しも楽な方がいいもんね。だからさ、耐えるだけの女なんて、男をつけ上がらせる『悪女』なんだ。女全体のレベルをひきずり下ろしているんだ。……いわば、今までのあんたは全女性の敵なんだ！)

窓の中のサユリが、叫んだ。

(善意が人の皮をかぶったようなあんたは、ひと様から褒められるかもしれないけど、人間としては半端もんさ。善にも傾けば悪にも走る、楯の両面を備えてこそいっちょ前の人間だよ……わかつてるんだろ、あんた。本当はその理屈が、身にしみてわかつているんだろう？ だったら迷うことなんかないんだ！)

街路樹の枝が大きく張り出しているために、サユリが立っているその場所は、街灯の光もあたらなかつた。人通りは絶え、車の往来もない。ものの十分も歩けばネオンの海が氾濫しているというのに、銀座にもこんな静かな一面があつたのだろうか。

いや、たつたひとつ聞こえる音がある——押し殺したようなエンジンの音。サユリの背後にライトを消した乗用車が、ゆっくりと近づきつつあつた。

3

『クール』を出た克郎は、次の店へ行くかどうか迷っていた。

時計を見る。

「……まだ十時半か」

軽い酔いのおかげで、吹く風が肌に心地よいほどだった。彼はのんびりと銀座を西から東へ渡っていた。日航ホテルからアーバンホテルにかけての、目も

おたのしみ

まばゆいネオンの流れに比較すれば、東銀座も外れのあたりは、わびしいほどの静けさを保っていた。

それだけに、フリの客の喧騒に悩まされずにすむ。

そんな店をひとつふたつ知っている克郎は、昭和通りの裏手にむかつて、歩いていった。

もうこのあたりは、繁華街というよりも、生活臭のたちこめる商店街といった風情だ。——その彼の目に止まったのが、先程の女性である。

（緒方サユリじゃないか……どこに行くつもりだろう）

彼女はまったく克郎の存在に気づいていないようだ。斜めに道を横切って、一軒だけ明りを点している雑貨店に、はいつていった。雑貨店といっても、いまはやりのコンビニエンス・ストアではなく、昔ながらの荒物屋だ。

新聞記者の特性は好奇心だから、克郎も彼女の買物に興味を覚えて、わざと店の前で立ち止まった。タバコを又り出す、まじぎ、寺門とらまぎなばう、くどつ

ける。

おかげで、彼女がなにを包んでもらったのか、はっきり知ることができた。

それは、包丁だった。

4

あくる朝、早く。

晴海の団地に住む老人が、ジョギングスタイルのまま、青い顔で交番へ飛びこんできた。顔なじみの警官をまのあたりにして、老人はいまにもべそをかきそうになった。

「死んでる、若い女が！」

「なんですって」

タイミングわるく、欠伸しかけていた若い警官が、不良品のロボットみたいにぴよこんと椅子から立ち上がった。

「ふんここ！」